

〔研究ノート〕

巡礼と地域経済

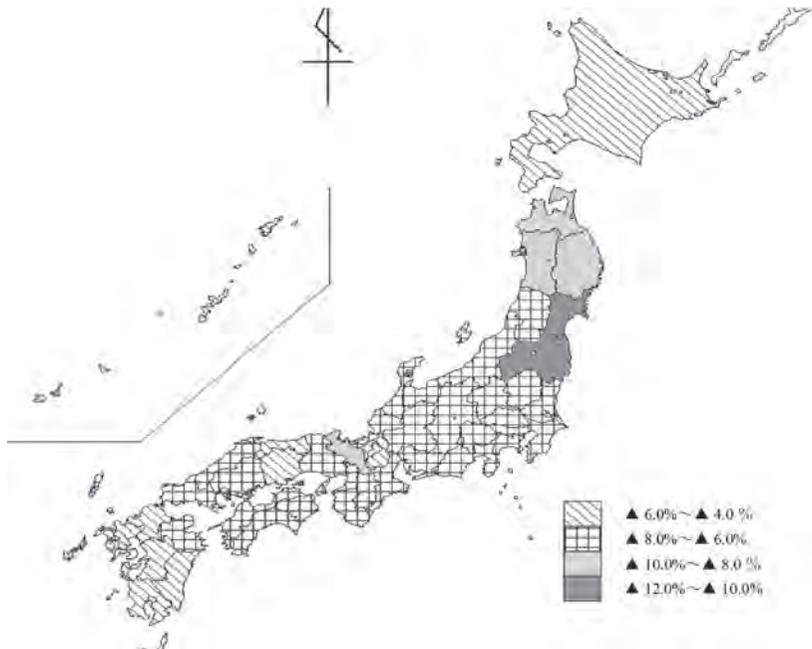
鈴木孝男

1 はじめに

地域経済の衰退がいわれて久しい。東京1極集中現象が進む中で、かつて地域経済を支えていた誘致企業（工業団地への誘致によって立地した企業）が撤退し、新たに進出する企業が現れないという事態が日本全体に広まっている。

戦後の高度成長期以降、日本の企業は大都市に本拠を置きつつも事業所を地方に拡大し、雇用や税収、消費などの面で地域経済に貢献してきた。しかし、これら誘致企業が減少するなかで、新たな地域経済の担い手を探す努力が続けられているが、なかなか効果を上げるに至っていない。それどころか地域経済の規模は益々縮小し、人口減少や高齢化が進む中で地域社会の存続すら危ぶまれる事態が進んでいる。

図1は現在の都道府県別事業所数の変化を示している。見てわかるように、すべての都道府県で事業所数が減少しており、特に東北地方で東日本大震災の被災地を中心に減少幅が大きくなっていることがわかる。



経済センサス 2012年、概要版

図1 都道府県別事業所数増減率（経済センサス2009年基礎調査と2012年との比較）

2 地域経済の縮小

各地域における問題はいろいろある。地域経済を成長させる（すなわち一人当たり所得を増大させる）方法として、どの地方も企業誘致に安易に依存し続けていたことと、誘致企業の土着化（すなわち地元企業との取引拡大や関連企業の創業など）を進められなかったこと、中央政府からの公共事業や補助金に依存して、自らの地域社会の自立を考えてこなかったことなど、各地域の政治・行政側の責任は免れない。

なおかつ教育面においても優秀な人材を中央に吸い取られていくのを積極的に推進してきたことも地方衰退の要因の一つとしてあげられる。すなわち、各地域に所在する高等教育機関ではなくて、東京や大阪に立地する有名大学に人材を送り込むことを使命としてきた地方の中等教育機関の責任も大きいといわざるを得ない。

せっかく地元で育てた優れた人材を中央に奪われ、さらに誘致企業の活動が地域と結びつくような努力をしなかったため、内発的な地域経済発展を実現してこなかったことで、日本の地方自治体は自らの寿命を縮める活動しかしてこなかったのではないか。

しかしながら、過去の歴史を振り返ると、各地域にはそれぞれ優れた文化や産業が存在し、人々の暮らしを支えてきた。自分たちの地域を自分たちで守り発展させようとする気概がみられた。中央政府に依存せずに、あるいは貧しさを人のせいにならずに、地道な努力で人々の暮らしを守ってきた地域の歴史があったのである。

3 地域に埋め込まれた文化の再評価

かつて江戸時代においては藩校を設置して人材育成を行い、養蚕業、織物など産業の移入、榎（はぜ）やコウゾなど商品作物の導入、新田開発や治山治水事業などを行い、財政難を克服しようと努力した地域もある。著名な例としては米沢藩、久保田藩（秋田県）、水戸藩などがある。これらはすべて成功したわけではないが、米沢織のようにその後の地域経済に影響を残したものもある。また、江戸時代中期になると、農業の発展によって農村部の生活が豊かになり、各地域において庶民文化が発達したり遠隔地への巡礼（特に伊勢神宮参拝）が盛んに行われるようになった。四国八十八カ所のお遍路に関する案内書が出版されたのは1687年である⁽¹⁾。

グローバル化が進む現代社会において、かつての努力を振り返りながら、地域経済を活性化する方策を各地域が主体的に考える必要性が高まっている。経済成長を実現したのは営利企業の積極的な事業活動であった。企業は競争に勝つために市場で激しく競争するが、人々の暮らしや地域文化を守り発展させようとすることはしない。人々の多くはこれら企業に雇用その他で関わりをもっているため、こうした非営利活動を積極的に行おうとはしなかった。

企業の力が衰退し、あるいは事業所を海外に移転させている中で、企業に代わる新たな主体を見つけ出して、それを軸に地域経済を立て直す必要が生じている。その軸になり得るのが文化である。ここで用いる文化とは、音楽、美術、歴史、映画、放送、演劇、スポー

(1) 頼富本宏（2009年） 141ページ

ツなどを示す。スロスビー（2002年）は文化の定義について、「ある集団に共有される態度や信念、慣習、価値観、風習など」、「人間生活における知的・道徳的・芸術的側面を伴って行われる人々の活動や、その活動が生み出す生産物」の2点をあげている⁽²⁾。

精神面での活動によって生じた様々な成果であり、直接人間の生存に結びつくものではないが、生活を豊かにする役割を果たしているもの、それが文化であろう。

文化は現在の経済活動に組み込まれているものもあるが、過去の成果物で現在は地域（個人）に埋め込まれていて、そのままでは確認できないものもある。いわゆる暗黙知状態である。特に歴史のある都市においては、長期にわたる歴史的積み上げによって文化が累積し、それが時代とともに人々の暮らしの中に沈殿して見えにくくなっていることがある。こうした埋め込まれた暗黙知としての文化を可視化して、それをういた地域作りをすることが求められている。

地域に埋め込まれた文化を可視化して観光資源として活用している事例に「長崎のカトリック教会群」の世界遺産化がある。長崎県にはキリスト教に関わる遺跡が多数存在する。これらの多くは安土桃山時代にキリスト教が広まり、江戸時代になって禁止されて信徒が弾圧を受けたと言う歴史に基づくもので、その多くが隠れキリシタン関係の遺跡で構成されている。そこには弾圧により処刑された殉教者に関する遺跡もあり、聖地としての意味合いが強く残されている。これらの遺跡群は、2007年に世界遺産の国内暫定リストとして登録され、世界遺産の指定を目指して活動している。この動きにより大浦天主堂、26聖人殉教地など29の文化遺産は単なる巡礼地から観光地へと大きく変化し始めている⁽³⁾。

これとは異なるが、大分県豊後高田市の「昭和の町」の取り組みも、昭和時代に作られた商店街の建物を使って、昭和の町の雰囲気を作り出し、中高年者を中心に多くの観光客を集めている。こちらの場合は単なる古びた商店街の建物が持つ昭和の雰囲気を強調して、観光資源として発掘した事例といえよう。そこで以下で文化が地域経済に与える影響について述べる。

4 地域経済と文化

（1）地域の経済発展と文化

地域経済の発展に関しては、その地域に埋め込まれた様々な「資源」が影響しているということがいわれてきた。学習地域論や進化経済学によれば、それぞれの地域においては歴史の積み重ねや累積的発展のもとで、様々な情報や技術、組織文化などが地域に埋め込まれ、それが暗黙知として形成されてきた。これらの暗黙知は地域の個人や企業の活動によって形式知化され、地域内や地域外の企業活動に用いられていくことになる。たとえば産業集積の内部におけるイノベーションの発生、情報の共有化、起業の促進などがそれである。

産業地域におけるこうした新技術の創造活動と同じような動きが、文化活動の盛んな地域においても生じている。文化活動が経済に与える影響は成長期の製造業に比べれば大きくはないが、確実に地域経済の成長に貢献している。音楽、スポーツ、映画、演劇、宗教

(2) スロスビー（2002年） 23ページ

(3) 木村勝彦 254～276ページ

などは、環境負荷が少ない分持続可能性を有している。また製造業の場合は賃金や地価など地域経済環境の変化によって移動することが多いが、文化産業においては歴史的蓄積が重要な意味を持っていることから、その地域に対する結びつきは大変強いものがある。

OECD のレポート（2005年）によれば、文化は持続可能な経済発展の要素として戦略的役割を持つということで、その例としてヨーロッパの都市における歴史ある地域の再活性化をあげている。Lazzeretti（2007年）はフィレンツェにおける文化産業の調査を行い、古い伝統文化に基づいた文化産業が創造的産業全体の72%を占めているとしている。さらに同市は絵画修復の技術において世界最高峰を目指しており、そこでは伝統文化と先端技術の融合が見られるという⁽⁴⁾。

フランスのコニャック生産地域であるポワトゥー・シャラント地域のコニャック産業を分析した D.Bastian, U.Hilper（2007）によると、同地域はこれまでのコニャック生産に関する歴史的・文化的蓄積を踏まえて、コニャックの高品質化を求めて事業を行ってきた⁽⁵⁾。その際に影響を与えたのが同地域における個性であり文化であった。それはたとえばワインの熟成、ブドウの摘み方、蒸留方法、などに関する暗黙知である。これらの伝統的文化に基づいた暗黙知に新しい技術（たとえばバイオテクノロジーのような）が加わることによって、他地域の製品とは異なる独自の製品が生産され、それが世界的に強い競争力を持つブランド（Martel, Hennessy, Courvoisier, Rémy Martin）を生み出している、というのである。

EU においては都市中心部の歴史的文化的な遺産を用いて地域の再活性化を図ろうという動きが見られる。それも単に古いものを残すということだけでなく、新しい文化産業を作り上げる方向で創造的な活動として行われているのである。

文化産業の発展は経済成長の副産物だという視点も必要であろう。近代社会以前（すなわち持続的経済成長が始まる前の時代）においても、特権階級を相手にした産業は成立していた。しかし近代的経済成長が始まると、中産階級が大量に発生し、これらの人々の需要を満たす産業が大量の消費財を製造・販売するようになった。

また、所得水準の向上や余暇時間の増加とともに、旅行、趣味、スポーツなどに時間を費やす人々が多数生まれるようになり、それらのサービス商品の供給業者である文化産業の担い手が生まれてくるのである。

（2）文化が地域経済に与える影響

地域経済の縮小傾向を受けて、代わりに発達しつつあるのが文化に関連した地域経済活性化の取り組みである。文化ということでは歴史や伝統文化をもとにした取り組みであった。社寺仏閣や城郭のような文化遺産を観光の対象として保存し、そこに外部から観光客を呼び込もうとするものであり、京都や奈良の例が典型的である。それに加えて最近では、前述の豊後高田市のように古い町並みが残っている場所をアピールする動きも広がっている。滋賀県長浜市、愛媛県内子町などで大正～昭和30年代までの街の様子を再現した取り組みが観光客を集めている。さらに古い町並み保存の事例という、岐阜県高山市、長野県南木曾町妻籠（つまご）宿、奈良県橿原市今井町、福島県下郷町大内宿などが

(4) L.Lazzeretti（2007年）187ページ

(5) D.Bastian and U. Hilper（2007年）、28～29ページ

表1 我が国の世界遺産（平成26年6月現在 合計18件）

	遺産名・地域	登録年
1	法隆寺地域の仏教建造物（奈良県生駒郡斑鳩町）	平成5年記載
2	姫路城（兵庫県姫路市本町）	平成5年記載
3	屋久島（鹿児島県熊毛郡屋久町，上屋久町） 自然遺産	平成5年記載
4	白神山地（青森県西津軽郡，秋田県山本郡） 自然遺産	平成5年記載
5	古都京都の文化財（京都市，宇治市，大津市）	平成6年記載
6	白川郷・五箇山の合掌造り集落（岐阜県白川村，富山県平村，上平村）	平成7年記載
7	原爆ドーム（広島市中区大手町）	平成8年記載
8	厳島神社（広島県佐伯郡宮島町）	平成8年記載
9	古都奈良の文化財（奈良県奈良市）	平成10年記載
10	日光の社寺（栃木県日光市）	平成11年記載
11	琉球王国のグスク及び関連遺産群（沖縄県那覇市他）	平成12年記載
12	紀伊山地の霊場と参詣道（三重，奈良，和歌山三県）	平成16年記載
13	知床（北海道斜里町，羅臼町） 自然遺産	平成17年記載
14	石見銀山遺跡とその文化的景観（島根県大田市）	平成19年記載
15	小笠原諸島（東京都小笠原村）	平成23年記載
16	平泉－仏国土（浄土）を表す建築・庭園及び考古学的遺跡群岩手県西磐井郡平泉町）	平成23年記載
17	富士山－信仰の対象と芸術の源泉（静岡県・山梨県）	平成25年記載
18	富岡製糸場と絹産業遺産群（群馬県）	平成26年記載

外務省のホームページによる。この他に暫定リストに掲載されているものが11件ある。

(http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/culture/kyoryoku/unesco/isan/world/isan_2.html)

有名である。

世界遺産への登録はこうした歴史的遺産の活用にとってはたいへん重要な契機である。表1にあるように、日本で世界遺産に登録されているのは18件であり、そのうち自然遺産が3件，文化遺産が15件となっている。世界遺産に登録された当初はメディアの報道等で注目され，従来とは比較にならないくらい多数の観光客が集まる。最近では群馬県の富岡製糸場がその例に当てはまる。しかし，国内に登録遺産が増えてきて，特に希少価値を持つとは考えられなくなっているため，今後は世界遺産になったということだけでは持続的な観光客の増加は期待できなくなっている。

他にイベント（音楽祭，映画祭，スポーツなど）や食べ物などで訪問者を増やそうという試みが各地で行われている。イベントは一時的に多くの来場者を見込むことができる

が、それは短期的な「事件」なので、その時だけ過剰な需要が発生することで地域経済に悪影響を及ぼす場合がある。すなわち、需要のピーク時に合わせて宿泊先、土産物販売、各種サービスなどで受け入れ体制を作ると、イベントがないときに大きなロスが発生するのである。地元としてはむしろ来街者数が安定してくれたほうがビジネスとしてはやりやすいといえる。

5 巡礼と地域経済

製造業が地域経済を担う核としての役割を果たせなくなっている状況のなかで、観光は地域活性化の有効な手段と期待されている。しかし高速道路や新幹線など高速交通網が整備されて短時間で遠距離を移動できるようになり、日帰りで往来が可能になっている中で、地方都市における宿泊や飲食などサービス部門の消費が増加しない。

こうした環境のもとで、今後地域経済を支える可能性があるものとして注目されるのが巡礼である。巡礼は経済活動においては観光として扱われている。最近では「巡礼ツーリズム」と言う言葉も使われるようになってきている。元々は宗教活動の一環であるが、長距離の移動と宿泊を伴い、異文化交流もあることから、観光として考えられ、実際に商品化されているものが多い。

筆者は2011年2月から2014年まで9回にわたって四国八十八カ所の遍路道を歩いてきた。まだ最終札所の大窪寺には到達していないが、こうした経験がこの論文を書くにあたっての基礎になっている。

(1) 人間と巡礼

①巡礼とは何か

観光産業のなかでの巡礼商品について考える前に、そもそも巡礼とは何かということについて考えてみる必要がある。巡礼は旅行の起源だという指摘があるように、人間が旅行することになるきっかけを作ったのが巡礼である。

星野英紀(1987)は巡礼とは「日常空間から一時脱却し、非日常時間、空間に滞在し、神聖性に近接し、再び日常空間に復帰する行動で、その過程にはしばしば苦行性を伴う」と定義している。彼は同時に、巡礼は旅行の起源だとも述べている⁽⁶⁾。

場所には様々な要素が埋め込まれている。気候風土や地形などの自然的要素はもちろん、歴史的背景や現在の諸環境があり、人間集団がそこで生活を積み重ねながら場所の特性を作り上げているのである。

その土地が持つ独自性(ヴァナキュラー: vernacular, 風土に根ざした建築物や方言のような地域独自のもの)はその土地に住み着いた人間集団が作り上げてきたものであり、地域文化と呼ぶことも出来る。一方、気候風土や地形などの自然条件は、時として人間の精神世界の拠り所となるような雰囲気を持つ場所を作り出すこともある。それが聖地である。聖地とは神聖な崇拜の対象となるものがあつたり、過去の歴史において神聖な人が亡くなつたりといった人為的な場所と、高山や大河の源流、岬、洞窟など地形的に先端や末

(6) 星野英紀(1987年)

端に位置する自然的な場所とが存在する。また最近では多くの人が亡くなった場所を聖地として慰霊の対象とする事例が出てきている⁽⁷⁾。

こうした人間が聖地と考えるような特別な場所を巡り歩くことが巡礼である。巡礼は多くの民族や宗教に共通して見られる行動形態であり、人間の特徴を形作るものの一つである。後に巡礼は旅へと進化するのである。星野英紀は前述のように旅の原型が巡礼であると述べている。俳人の種田山頭火は、「人生は遍路なり」という言葉を残している。このように巡礼は人間が持つ本質的な行動の一つに含められるべき重要なものである。

②巡礼の構造

A. ヘネップ (A.Gennep) は人間の集団における行動の特性を分析して、そこに儀礼と呼ばれるものを見いだした。特に人間が俗界から聖界に移る場合、「通過儀礼」が存在すると指摘した。例えばキリスト教の洗礼や叙品式がそれにあたるという。「通過儀礼」はさらに、分離儀礼、過渡儀礼、統合儀礼に分けられる。例えば分離儀礼は葬儀、統合儀礼は結婚式、過渡儀礼は妊娠期間や婚約期間などでみられるのだという⁽⁸⁾。

星野英紀 (1987年) によれば、V. ターナー (V.Turner) はヘネップの3段階構造を巡礼行動に当てはめて以下のように構造化している。すなわち、

日常生活からの分離



聖地での一時的滞在 (推移)



日常生活への復帰 (再統合)

このうち、日常生活からの一時的離脱と非日常性による人間性回復 (コムニタスへの復帰) が人々を巡礼に向かわせる大きな動機になっているという。日常性 (日頃の社会の階層、人的関係など) から解放され、聖地における非日常的空間において人間らしさ (コムニタス) を回復することに巡礼の持つ重要な役割があるというのである。これは旅行においてもある程度共通する特質であろう⁽⁹⁾。

身分制が厳しく守られていた中世までの社会においては、こうした「自由」な空間を経験できる巡礼は、その過程における厳しい環境を差し引いてもなお、大きな楽しみであったといってよいであろう。それは宗教の仮面をかぶってはいるが、人間の存在に関わる重要な欲求であるといえよう。

③根源的な巡礼

現在行われている巡礼のほとんどは、何らかの宗教活動に含まれている。しかし、宗教の枠を外してみてもほとんどの宗教に巡礼という行動が共通して存在していることを見ると、巡礼は人間が持つ根源的な欲求の一つと考えた方が合理的であろう。

文化人類学の研究において、宗教の影響を受けていない巡礼の調査があることが報告されている。それはメキシコ北部 (ナヤリット州) に居住するウィチョル族という原住民の行動である。黒田悦子 (1987年) によると、ウィチョル族は彼らの民族の始原の地 (数百

(7) 広島・長崎、アウシュビッツ、ニューヨークのグランドゼロなど

(8) ヘネップ (1977) 第1章

(9) 星野英紀 (1987年) 6~7ページ

キロ離れている場所) への巡礼を、以下の手順により行っているという⁽¹⁰⁾。

第1段階 シャーマンと少人数の希望者により巡礼団を組織する。

第2段階 全員が自らの汚れを告白して清めの儀式をおこなう。



それにより参加者は全員神になり、出発まで行動に一定の制約が課される。

第3段階 聖地に向けて出発する (かつては徒歩で移動)

第4段階 聖地においていけにえを捧げる。

第5段階 ペヨテ (幻覚作用のあるキノコ) を探して収穫し、全員で食してエクスタシーの状態になる。

第6段階 帰村して村人とペヨテを共に食べる。

ここでいう彼らの聖地とは、かつて先祖たちが暮らしていた洞窟のあった場所のようで、そこを訪れることが彼らの巡礼の意義だという。おそらく、人間が遊牧生活から定着農耕生活に移った際に、かつて住んでいた場所を訪れるという行為をしていたのではないか？

人間は定着農耕により都市を築いて文明を発達させるようになってからまだ1万年は経過していないであろうから、それ以前の人類の数百万年以上の歴史から考えると、定住地とそれ以前に生活をしていた場所との往復は、彼らにとって重要な意味を持っていたように思われる。各宗教に残る巡礼は、こうした行動形態が人間の心理の中に組み込まれ、それが現代にまで継承されて現在のようになっただけではなからうか？

このように考えると、巡礼は宗教的な活動の一つのように見えて、実は人間社会の根本に共通に埋め込まれた意識であるように思われる。多くの宗教活動の中に巡礼があり、その形態が共通していることも、こうした人間が持つ根本的な精神性から導き出されているように思われるのである。

④巡礼の共通性

興味深いことに、仏教、キリスト教、イスラム教など各宗教で行われている巡礼には共通した特徴がある。筆者が見たところでは、その共通点を整理すると以下の8点が指摘できる。

- a 巡礼者用の服装 (巡礼服) がある。それは死者が身につけるものであることが多い。
- b 巡礼者が巡礼に行く前に清めを行う。
- c 指導者を中心に巡礼団が形成される。
- d 巡礼者は巡礼中聖人として扱われる。
- e 巡礼者への特別の応接がある (日本のお接待、ヨーロッパのオスピタルなど)。
- f 巡礼における「奇跡」の発生 (病が治癒する、障害がなくなるなど)。
- g 巡礼地の写しが生ずる。
- h 巡礼に対する権力の介入がある (禁止、調整など)。

特に a ~ e の特徴は巡礼の行動の基本であり、宗教は異なっても巡礼に関する限りほぼ共通の形態を伴ってることがたいへん興味深い。また g の写しについては本稿の主題であり、重要な意味を持っているので少し触れておきたい。

(10) 黒田悦子 (1987年)

聖地は一つではなく、いくつか存在する。宗教にもよるが、古くからある聖地に加えて、新しく聖地となる場所が生まれているのである。例えばキリスト教の場合、古くはキリストが処刑されたエルサレムや使徒が処刑されたローマのほか、中世になって聖地として多くの信徒を集めたスペイン北部のサンチャゴ・デ・コンポステラがあり、19世紀から20世紀にかけて、ルルド（フランス南部）やファティマ（ポルトガル）、ヴィース（ドイツ南部）などの聖地が新たに登場し、多くの巡礼者を集めた。日本の場合、西国三十三カ所観音霊場が始まりといわれるが、その後四国八十八カ所が開かれ、さらに板東三十三カ所など各地に観音霊場や八十八カ所霊場が開かれた。

もともと霊場といわれる場所は、人的要素によるものにしても自然的要素を土台にしたものにしても意図的に作られたものであり、条件が整えば古い伝統的な聖地以外でも作ることが出来るものである。

キリスト教で聖地が増えた要因の一つにエルサレムの異教徒支配という政治的要因がある。聖地奪還を目指した武装巡礼（十字軍）が行われていた11世紀ころに、サンチャゴ・デ・コンポステラが聖地として注目されるようになる。19世紀に入って鉄道や道路が整備されて交通手段が発達し、手軽に移動が出来るようになると、新しい巡礼地が現れてくるのである。

⑤巡礼とツーリズム

すでに見てきたように、巡礼は多くの人の長期間にわたる移動を伴っており、それ自体旅行（ツーリズム）と呼んでもよいような形態である。しかし、これまで宗教研究者たちは巡礼とツーリズムを分けて考える傾向があった。すなわち、巡礼は聖なるもの（聖地）を目指して神聖な活動をするのであり、ツーリズムは旅行（俗なるもの）なのだ。こうした2元的なとらえ方に対しては、巡礼を宗教ツーリズムとしてとらえ、聖と俗のいずれにもあてはまるもの、という理解も出てきている⁽¹¹⁾。

実際、巡礼者への調査においても、純粋な宗教目的より「自分を見つめ直す」「冒険」「資本主義社会とことなる価値観に触れたい」など非宗教的な目的で巡礼をしている人が増えているという⁽¹²⁾。

四国遍路における筆者の経験でも、宗教的形式をとりながらも、実際には「自分への挑戦」「徒歩で四国を巡ること」などツーリズムの要素が強い巡礼者がかなりいた。これらのことを踏まえると、現代社会における巡礼は単なる観光ではないが特殊なツーリズムだということができるだろう。

この点について、門田岳久（2013年）は巡礼とツーリズムを一体のものとして捉えようとしている。彼は「巡礼ツーリズム」という表現を用いており、「どこまでが宗教でどこまでが観光なのか、明確な線引きを拒む混淆性」を有し、「巡礼ともツーリズムとも独立した性質を持つ一つの単位」になっているのが巡礼ツーリズムなのだという⁽¹³⁾。

現在広く行われている巡礼は、単なる宗教活動でもなく、名所旧跡を巡る観光でもない。そこには各主体の実践（聖地を巡る行為）が対象（聖地巡礼やその対象地域）のあり方に

(11) 山中弘（2012年）序章

(12) 同書 20ページ

(13) 門田岳久（2013年）30ページ

影響を及ぼし、変化させていくのである⁽¹⁴⁾。彼はこれを再帰性概念と呼んでいる。巡礼ツーリズムの参加者は、予期せぬ精神的体験をすることが多く、門田はそれを「内的経験を価値化した『経験消費』」をしていると述べている⁽¹⁵⁾。

こうした非日常的経験は、ターナーがいうコムニタスと対をなす巡礼の重要な要素であり、そこに巡礼が長く人々の心を捉えている理由があるのかもしれない。多くの場合、巡礼は参加者に苦痛を強い、現代社会が提供している利便性を排除するような状況においやるのであるが、巡礼者はそこから超常現象を体験し、かつ日常生活から解放された精神状態を味わうのである。

巡礼の対象となる「聖地」の特性によって、巡礼に参加する者の動機も変化する。一般的には現世的な利益（ご利益）を求める者が多いと思われるが、実際には聖地に行ってそこでの雰囲気に入る、長距離歩行（ウォーキング）への挑戦、自分さがし、などを目的とする人が増えているようだ。

6 日本における巡礼

(1) 巡礼の発生と分化

日本における巡礼は、中国から渡来した仏教がその起源となる。山林修行、補陀洛信仰のような辺地での修行が初期の巡礼の形態であったであろう。日本独特の山岳信仰である修験道⁽¹⁶⁾も巡礼の起源と何らかの関係があるものと思われる。

巡礼地の歴史を見ると、京都を中心とした政治体制の時代にあつては平安時代末期の12世紀頃から西国三十三カ所の観音霊場への参詣が盛んになったが、鎌倉幕府以降になると板東、秩父に霊場が現れる。空海が開いたとされる四国八十八カ所霊場は、確認できる起源は平安時代末期である。江戸時代に入って街道や海上交通が整備されて以降は、一般庶民の間にも四国八十八カ所巡りが盛んになり、それから派生した新四国霊場が各地に作られるようになるのである。つまり、人々が手軽に巡礼に行けるようになると、「写し」が発生して新しい霊場が作られるのである⁽¹⁷⁾。

千葉県の場合、江戸時代中期以降に北西部を中心に霊場が作られた。これを新四国霊場と呼んで、農民たちが講をつくって団体で巡礼をすることが活発に行われるようになるのである。

久保田展弘（1985年）によれば、初期（飛鳥時代）の修験道の行者の多くに渡来人がいたこと、これらの行者が鉱物資源に関する知識を持っていたことから、行者が山間部に入って各地を巡っていたことと関連性があることが窺われる⁽¹⁸⁾。

(14) 同書 31ページ

(15) 同書 301ページ

(16) 久保田展弘（1985年）によると、修験道は役小角（えんのおずぬ）と呼ばれる行者（僧侶ではない）が開いたとされる山岳信仰で、仏教の影響を受けているが日本古来の宗教と見られている。役小角の前に能除仙（崇峻天皇の第3王子といわれる）が出羽三山（羽黒山、月山、湯殿山）を開いたとされる。

(17) 佐藤久光（2004年）17～18ページ

(18) 久保田展弘（1985年）114～115ページ



徳島県。個人で遍路道沿いに接待小屋をつくり、接待をしている女性



徳島県。遍路道（かなりの山道）に接待小屋を自力で建てている男性。

（２）四国遍路と接待文化

四国八十八カ所の巡礼を特徴づけるものの一つにお接待がある。お接待とは遍路道沿いの住民が遍路者（特に歩き遍路）に対して様々な支援をすることである。人々はなぜお接待をするのか。そもそも仏教においては、僧侶に対して一般人が「お布施」や「托鉢」により寄付を集めることが古くから行われてきた。お接待はその延長線上にあるものであるが、僧侶ではない遍路者に対して行われる（つまり地元の住民が外部から来た普通の人に寄付をする）ところに大きな特徴がある。

お接待で今日されるものとしては、簡単な飲食物、食事、休憩場所の提供、現金の手渡しなどがある。接待する側の地元民の考え方は、遍路者に対してお接待をすることが自分の功德を積むことになってご利益がある、ということのようである。和歌山のある地域（有田市、野上町、かつらぎ町など）では、接待講という団体を作って毎年春先に四国（一番札所の霊山寺）にやってきて、お接待をする風習が残っていて、一部では現在でも続いているという⁽¹⁹⁾。

お接待は四国の遍路道沿いの人々の生活に深く根を下ろしているようで、遍路でない外来者に対するもてなしに対して、四国の人々がお接待という言葉を気軽に使っている場に接することがよくある。

お接待は無償の善意であり、見返りを求めない施しである。かつてはほとんど金銭を持たない遍路者がお接待の力で四国八十八カ所を回ることがあったようだが、最近の遍路者の多くは自力で食事や宿泊、交通費などの費用をまかなうことができるので、お接待は必要ない場合が多い。しかし、古くから続く風習としてのお接待を経験することで、遍路者は四国の人々が持つ弘法大師への信仰心や遍路者を大切にする地域文化の神髄に接することができるだけでなく、無償の善意を提供されたことによる精神的安心感や宗教的至福感に満たされて、大きな充実感を味わうことができるのである。

（３）移し四国（新四国）の発生

移し四国とは四国八十八カ所の霊場巡りを他の地域に移して、そこで巡行を行おうというもので、四国に行きたいけれど遠くて行けないという人々のために作られたものであ

(19) 朝日新聞デジタル、2013年4月12日付け

表2 『全国霊場参拝事典』にみる観音霊場と弘法大師霊場の地域別分布

	観音霊場	弘法大師霊場
北海道・東北	11	
関東	15	9
中部	20	7
近畿	15	4
中国	18	1
四国・九州	8	5
島四国		9

る。移し四国の研究が少ないため、詳細な実態は不明であるが、大法輪閣が2005年に改訂新版を出した『全国霊場巡拝事典』には、観音霊場も含めて多数の巡礼地が紹介されている。同書が紹介している観音霊場と弘法大師霊場を地域別に整理したのが表2である。

しかし、この霊場事典に入っていない霊場が多数あるようで、後に述べる千葉県の東葛印旛大師のように現在盛んに巡行が行われている霊場は含まれていない。『全国霊場巡拝事典』の中で現在でも盛んに行われている佐渡の例について門田岳久（2013年）により紹介する。

佐渡島においては、江戸時代（19世紀初め）に四国から砂を持ち帰った僧侶がそれを島内の八十八カ所の寺院に奉納し、それを「佐渡四国遍路」と名付けたことから始まったといわれる。その後一時期衰退したが、1931年には島内を一周する「佐渡四国八十八カ所霊場」が設立された。戦後になると、篤志家によってこの島内一周の巡礼路が整備され、ガイドブックが発行された。その際、荒廃して住職がいなくなった寺院を札所から外してほかの寺院と入れ替えて、名称も「佐渡新四国霊場」と変えたのである。

この新四国霊場を整備した篤志家は田中茂という人物で、農協職員から旅行業に転出し、自ら佐渡の巡礼観光ツアーを企画運営して佐渡の巡礼観光地化に貢献した。田中は「百万人観光」というスローガンを掲げて、巡礼の活性化により佐渡に100万人の観光客を呼び込むことを提唱し、行政や地域住民もそれに賛同して、この言葉がいつしか佐渡島全体のスローガンになったという⁽²⁰⁾。

このほかに移し四国では知多半島（愛知県）、小豆島（香川県）、篠栗（福岡県）が有名とのことである。これらの霊場巡りについては各地のホームページを見ると札所や巡礼路の情報が提供され、いつでも誰でも巡行ができるようになっているようであるが、実際の参拝状況については詳細は不明である。

(20) 門田岳久（2013年）157～166ページ

7 千葉における新四国霊場の発達と衰退

(1) 新四国霊場の発生

江戸時代中期以降、下総地域において、四国八十八カ所霊場の移しが生まれた。塚田芳雄（1988年）によれば、印西新四国（現在の印西市、旧本埜村、白井市など）が1721年、相馬新四国（取手市、我孫子市など）が1763年に始まっている。さらに下総四郡大師（八千代市、船橋市、習志野市、市川市、白井市、柏市、松戸市など）が1807年に起こっている。このうち下総四郡大師はその範囲が広がったため分割され、吉橋大師（八千代市・船橋市中心）、東葛印旛大師（柏市、松戸市中心）、葛飾大師（市川市、船橋市中心）などが成立した⁽²¹⁾。

江戸時代後期にこうした弘法大師ゆかりの霊場巡りが盛んに行われていた背景について、村田一男は本百姓体制のもとでの農業生産の発展、江戸・大坂で発達した化政文化の農村部への流入などの影響を指摘している（千葉商科大学で筆者主催により行われた「シンポジウム 千葉のへんろ道」2014年2月15日での報告による）。村田によれば、講を組んで団体で札所巡りを行い、各所で接待として飲食をともししている様子は、支配階層から見ると秩序を揺るがす行為と見なされていたようで、1846年に関東取締出役が新四国八十八カ所霊場巡りに対して禁令を出したほどであった⁽²²⁾。

これらの新四国霊場の参拝は講による集団で行われ、毎月1回の「お籠もり」を経て毎年一定の時期に講員が団体で札所を巡る巡礼をおこなっていたのである。これらの新四国のうち、現在でもまだ続いているのが東葛印旛大師と六崎組十善講（佐倉市）の2つである。特に東葛印旛大師は規模が大きく参加者が多いことから、江戸時代から200年以上に渡って続く風習をよく残していると見ることができる。

(2) 東葛印旛大師

東葛印旛大師は前述のように1807年に始められた下総四郡大師が分かれてできたもので、成立は1822年であるという⁽²³⁾。

企画展資料によると、札所が置かれたのは現在の柏市を中心に鎌ヶ谷市、白井市、松戸市に広がり、手賀沼南岸を中心に回るようになっている。巡行すると総行距離は85Km（『東葛・印旛大師霊場案内』を自費出版した藪崎一男によると、全行程は76Km）におよび、これを以前は3日で回っていたようだが、現在では4日と5日目の練り込みの5日間で行っている。

東葛印旛大師は一度江戸時代末期に消滅しかかったことがあった。その要因は不明であるが、講組織そのものが衰退して巡行が行われなくなったことが一時期あったようである。それが1867（慶応2）年に柏村長全寺の瑞宝ら3人が発願主になって組織を立て直し、巡行を再開したという⁽²⁴⁾。この時から33カ村がそれぞれ講を設け、それらの集合体として

(21) 塚田芳雄（1988年）

(22) 村田一男（2014年）「江戸時代後期における庶民の生活と巡礼」『千葉のへんろ道』報告要旨

(23) 柏市郷土資料館第16回企画展「送り大師-柏に伝わる県下最大の巡礼文化」資料 2013年9月14日～同年12月23日開催、以下企画展資料と呼ぶ。

(24) 企画展資料



東葛印旛大師 2014年5月



お接待の様子



最終日の札所での休憩



最終日のお練り込みの様子

東葛印旛大師組合を作って、毎年5月初めに「送り大師」と呼ばれる札所巡行を行ってきた。これが現在まで続く東葛印旛大師の起源である。

八十八カ所の札所巡りは毎年5月1～5日に行われ、結願区という最終目的地を1日目の出発点として回っている。4日目までで札所のほとんどを巡行し、最終日には「お練り込み」をして結願区の寺院に戻るのである。かつては5月1～3日が巡行で、4日が練り込みとなっていたが、明治31年からは4泊5日と現行の日程になり、この頃から結願区を設けてそこを出発地と最終目的地とし、最終日に稚児行列や笛・太鼓等の演奏、ご詠歌などを含めた大がかりな行列で練り込むことになった。

巡行の際には講員は白装束の巡礼服を着用し、幡、先達（結願区の寺院の住職）、貝吹き（ホラ貝ふき）、笈（きゅう、大師の像をいれた木製の背負い箱）、講員の順に行進することになっている。距離が長いので、1日に約20Km強を歩いて各札所でお勤めを果たしていく。途中何か所かで接待があり、果物・飲み物・菓子などが振る舞われて講員の疲れを癒やすのである。

東葛印旛大師は年に1回の札所巡行を行っているほか、毎月21日に「お籠り」と称してその年の結願区の寺院（すなわち翌年の巡行の出発・最終目的地）に集まって経典を読誦しつつ会の運営などについて話し合っている。この巡行を行っている組織が「東葛印旛大

師組合」で本部役員（7人）・顧問（3人）、四国八十八カ所霊場会の大先達、先達（21人）が役員として名を連ねているほか、現在支部（地区と呼ばれている）が29ある。各地区には大世話人、副大世話人（いない地区もある）、総代がいて、その下に一般講員がいる、という構造になっている。講員数は不明である。

千葉県内での准四国八十八カ所巡りの活動がほとんど姿を消している中で、東葛印旛大師が江戸時代から継続して行われていることはたいへん貴重である。東葛印旛大師がなぜ現在まで続いてきたのかについては、まだ調査ができていないのでここでは要因分析はしないでおきたい。ただ、筆者が今年（2014年）5月に初めて巡行に参加して聞いた話や雰囲気から見て、寺院が積極的に活動していることが影響しているものと思われる。同組合には東葛印旛仏教会という寺院の組織があり、そこが巡行に積極的に関わって指導的役割を果たしているのである。これらの寺院は真言宗豊山派が中心であるが、天台宗、曹洞宗、浄土宗など他宗派の寺院（いずれも札所に指定されている）が参加している。巡行においては常に仏教会の僧侶（若手中心）が全体を引率するような形になっている。

巡行は徒歩で行われるが、講員の高齢化が進んでいるためかマイクロバスが伴走していて、歩けなくなった人をひろいながら札所巡りをサポートしているのである。巡行は比較的自由に歩くようになっている。ただ自動車が通る一般道を歩く場面が多いので、交通整理のための警備員が雇われて交通安全に配慮している。

札所に着くたびに「般若心経」を読誦し、光明真言を唱えたあと、お賽銭を供える。服装は講員には「行衣」と呼ばれる白衣の着用が義務づけられ、結願区の名を染め抜いた手拭いを首に掛けることになっている。全員がほぼ白装束で行進するので、事情を知らない人の中には何かの新興宗教かと勘違いすることもあるという。

5日目は最終目的地である出発地の寺院に「お練り込み」を行う。お練り込みはこれまで巡行してきた先達と講員に加えて、結願区の子供や若者が稚児姿で加わって、華やかに行進するのである。行列の順番は、露払い（獅子舞）、幡二流（のぼり旗二本）、貝吹き（ホラ貝）、万灯（竹竿の先に放射状の赤い造花を垂らしたもの）、世話人、稚児（小児、若衆）、先達、笈、講員の順で進むようになっており、かなり長い行列になる。組合の主催で結願式が行われ、その後は各講ごとに集まって宴会となる。

以上が2014年5月1～5日に行われた東葛印旛大師の様子である。筆者は全行程を参加したわけではないので、一部は『企画展資料』を参照している。

なお、6日には村結願といって、講員が区内の札所だけを巡拝し、慰労の宴をはるところもあるし、布施、手賀、片山、下柳戸、上柳戸の5区だけで独自に島大師八十八カ所の霊場巡りを1日で行っているようだ。

この東葛印旛大師組合では20条からなる規約が作られており、この規約は周囲の環境変化に対応して何度も改訂されながら今日に至っている。また巡行時の接待や灯明料（接待してくれる講への寄付）などに関する細かい申し合わせも存在する。

（3）葛飾大師

葛飾大師は下総四郡大師が分かれてできたものの一つで、船橋市史民族文化財編（2001年）によると、1822～23年頃に成立して葛飾大師とか東国八十八カ所大師講市川・船橋組

と呼ばれた⁽²⁵⁾。

同書によると、葛飾大師は船橋市九日市（現在の本町）の覚王寺を1番として海神、山野、高谷、本行徳、猫実、堀江、河原、新宿、稲荷木、市川、根本、国分、菅野、八幡、寺内、古作、印内、法典、行田、夏見、船橋と周り、八十八番の五日市西福寺までつながっているという⁽²⁶⁾。

船橋市史のよると、葛飾大師は昭和40年頃に消滅していて、現在では残っていないという。覚王寺住職の高梨堅堂氏によると、葛飾大師は1970～80年代あたりまではやっていたということで、明確ではないが昭和40年代までは続いていた可能性がある（2014年4月21日、覚王寺でのヒアリングより）

八十八カ所の札所については村上昭彦の研究がある。村上は千葉県内の石碑の研究で多くの実績を重ねる傍らで、吉橋大師の復活を試み、八千代市立郷土資料館館長（当時）であった村田一男やむつみ街づくり研究会などととも2005年～06年にかけて実際に札所を歩く試みを実施した。その詳細は『新四国を歩く』（八千代市郷土博物館、2006年）に詳しいが、かつての札所を掘り起こし、そこを巡回する道筋を明らかにするとともに、この地域に残されていた新四国霊場巡りの記録（地図、ご詠歌帳、絵馬など）も探して前掲の『新四国を歩く』に掲載するなど大変貴重な活動をした人物である。

村上昭彦（2011年）においては、明治時代後期に実際に葛飾八十八カ所の札所を歩いた梶原石五郎が残した納経帳をもとに、当時の札所と札所番号、梶原がたどった道筋を地図をもとに推定したのである。このユニークな研究によって、葛飾八十八カ所をかなり具体的に特定し、実際に歩く時の重要な手がかりが示された。まさに村上の労作といえよう。

筆者はこの村上の論文をもとに、現在札所と巡行ルートの確認作業を行っている。まだすべてが終了しているわけではないが、船橋市・市川市の札所についてはある程度作業が進んでいる。これまでのところ、葛飾八十八カ所に関する記録としては、いくつかの寺院に残された石碑があるが、それ以外では一部の寺院でお札が残されている。石碑が確認できたのは、船橋市本町の覚王寺（1番）、宮本の西福寺（88番）、夏見の薬王寺（23番）、市川市高谷の安養寺（38番）、同菅野の不動院（35番）、市川の観音寺（40番）、極楽寺（39番）、国府台の根本寺（42番）、国分の国分寺（59番）、寶珠院（46番）がある。しかし全体としては形跡が残されていない寺院のほうが多い。

調査をしてみてわかったことの一つに、寺院の統廃合がある。住職がいない、急速な都市化によって新たにやってきた住民と寺院との関係が保てないなどの理由があるものと思われる。現在この葛飾大師を再現しようとした場合、札所はかなり減少するものと思われる。

調査の中で寺院側にインタビューを試みたことがあるが、この歴史的遺産について知っている人はごくわずかであった。市川の歴史に詳しい地元の方に話を聞いても、今のところ反応はでていない。この点については、葛飾大師の場合、巡行が終わってからすでに40年以上の年月が経過していることと、この地域で日蓮宗の影響が強いことから、真言宗に関係の深い大師信仰と札所巡行があまり盛んではなかった可能性がある。但しこれは筆者の推論であり、今後の詳細な調査が必要である。

(25) 船橋市史編纂委員会（2001年）452ページ

(26) 同書 453ページ



市川市国分の寶珠院にある石碑。
予州浄瑠璃寺写と読める。浄瑠璃
寺は愛媛県松山市にある46番札所



市川市国府台の根本寺門前にある
石碑。予州佛木寺写とある。佛木
寺は愛媛県宇和島市にある第42番
札所

8 人はなぜ巡礼をするのか

これまで見てきたように、人間社会においては巡礼やそれに似た行動が多く見られる。最近の若い世代の中でも、「聖地巡礼」と称してアニメやコミックなどの舞台となった場所を訪れる人が増えているという。地域によってはかなりの来訪者がある場所も出ている。この現象は本論文が取り上げた巡礼と共通するものがある。若者たちが考える聖地は宗教上の信仰の対象ではなく、彼らが親しみを覚える作品の舞台となった場所であり、そこで自分らしさを取り戻すことができると考えているのではなかろうか。

このように考えてくると、聖地巡礼は国、民族、宗教、世代を超えた人間の活動であり、そこには人間の本質的な欲求が働いているのではないかと思われる。V.ターナー（1996）はその本質的欲求をコムニタスと呼んでいる。ターナーによれば、コムニタスとは人間が社会生活において組み込まれている構造的役割や身分などの拘束から解放された人間的関係を持つことだ⁽²⁷⁾。

巡礼に出てから元の生活に戻るまでの過程を考えてみると、そこには非日常的空間が広がり、人間関係も構造的なしばりから解放された結びつきが実現している。巡礼参加者はここに大きな魅力を感じ、精神的充実感を味わうのであろう。筆者も四国遍路をしながらこの魅力に気づいていた。巡礼（特に徒歩による巡礼）には多くの苦痛が伴う。車や鉄道などの高速移動手段になれている私たちは、それをあえて捨てて山野、海浜等を徒歩で巡ることは肉体的にかなり酷な行動であり、宗教上の修行を求める者以外にはほとんど魅力を感じないはずである。しかし実際には四国だけで年間数千人の巡礼者（おへんろさん）

(27) ターナー（1996年） 192～193ページ

が歩いているのである。

歩きながら、あるいは遍路宿についてからの巡礼者同士の交流や、地元の人々とお接待を通じての交流は、日常生活では得られない精神的充実感や喜び、感動をもたらす。それが巡礼の魅力であり、多くの人々を引きつけているものと思われる。この現象は四国に限られたものではない。移し四国としての東葛印旛大師に参加したことで、似たような充実感を得ることできる。

こうした人間としての根源的な充実感・開放感があるからこそ、歴史を超え、地域や宗教を超えて巡礼が世界的に広まっているのだと思われる。巡礼は多くの人を動かす力を持っており、それが地域経済に与える影響は無視できないものがある。かつて東京で、商店街活性化のために人気タレントの像をおいて客寄せを図ったことがあった。メディアで取り上げられたこともあって一時的なブームがあったが、すぐに効果が消失してしまったようである。このように単に人集めで巡礼を行おうとしても、それは成功しない。あくまでも神聖なもの（聖地）にしっかりと向き合い、聖地の魅力を高める努力をすることで多くの人々の心を引き寄せることができるのだ。

本研究は平成25年度学術研究奨励金の支給を受けて実施したものである。学園の財政状況の厳しい中で、こうした研究奨励事業を実施していただいていることに対して感謝の気持ちを表したい。

参考文献リスト

- 1 D.Bastian and U. Hilpert, Knowledge : the territorial basis of development, in ibid
- 2 L.Lazzaretti (2007) Culture, creativity and local economic development: evidence from creative industries in Florence, in P. Cooke, D.Schwartz (2007) *Creative Regions*, Routledge
- 3 大法輪閣編集部編 (2005年)『全国霊場巡拝事典』大法輪閣
- 4 船橋市史編纂委員会編 (2001年)『船橋市史 民俗文化財編』
- 5 A.V.ヘネップ, 綾部恒雄・裕子訳 (1977年)『通過儀礼』弘文堂
- 6 星野英紀 (1987年)「巡礼—その意味と構造」聖心女子大学キリスト教文化研究所編『巡礼と文明』春秋社
- 7 星野英紀, 山中弘 (2012年)『聖地巡礼ツーリズム』弘文堂
- 8 柏市郷土資料館第16回企画展「送り大師—柏に伝わる県下最大の巡礼文化」資料
- 9 木村勝彦 (2012年)「宗教ツーリズムにおける真正性と倫理の問題」山中弘編『宗教とツーリズム』世界思想社
- 10 久保田展弘 (1985年)『山岳霊場信仰』新潮選書
- 11 黒田悦子 (1987年)「中米の巡礼」, 同書
- 12 村上昭彦 (2011年)「新四国巡礼の記録～葛飾八十八カ所～」(『千葉文華』第41号, 2011年2月)
- 13 村田一男 (2014年)「江戸時代後期における庶民の生活と巡礼」『千葉のへんろ道』報告要旨

- 14 佐藤久光（2004年）『遍路と巡礼の社会学』人文書院
- 15 スロスビー（2002年）『文化経済学入門』日本経済新聞社
- 16 V.W.ターナー，富倉光雄訳（1996年）『儀礼の過程』新思索社
- 17 塚田芳雄（1988年）「千葉における三十三カ所，八十八カ所の概況について」『千葉県の歴史』第35号
- 18 八千代市郷土博物館，2006年『新四国を歩く』
- 19 頼富本宏（2009年）『四国遍路とは何か』角川書店

（受理日：平成26年8月6日）

（校了日：平成26年9月8日）

[抄 録]

長期にわたる不況や日本を取り巻く周辺諸国の経済発展などにより、日本経済全体の縮小が指摘されている。特に地域経済の衰退傾向になかなか歯止めがかかっていない。それに加えて少子高齢化、人口減少が着実に進行しているので、地域経済が置かれている現状はきわめて厳しいものがある。

その一方で、世界遺産登録で盛り上がりを見せる地域がある。そこには地域に埋め込まれた歴史的遺産（資産）を掘り起こすことの価値が示唆されているのである。文化はもともと地域との結びつきが深い性質を持っており、世界遺産の事例は、地域文化の発掘が地域経済に何らかの影響を与えることを示しているのである。

本稿では文化の中でも「巡礼」に焦点を当ててその特質を確認するとともに、その今日的なあり方について論点を整理してみた。

巡礼は主要宗教にすべて存在する世界共通の宗教的現象である。毎年多くの巡礼者が聖地を訪れ、そこでその宗教に伝わる何らかの恩恵（ご利益）を享受することで精神的充足感を味わうのである。最近ではアニメやコミックに関わる聖地巡礼も盛んになっており、その対象はともかく巡礼が世代を超えた共通の行動様式であることが確認できるようになった。

巡礼は実際的には旅行であり、観光（ツーリズム）の一部を構成している。この規模が大きければ大きいほど、巡礼の経済効果が大きくなる。巡礼が行われている地域は限られておるが、よく観察してみると対象地域が移動していることがわかる。

日本では四国八十八カ所のいわゆる「お遍路」が有名であるが、千葉県には弘法大師ゆかりの巡礼地（移し四国）が江戸時代に発生して広く行われてきた。本稿では千葉県内でもいまなお毎年盛大に行われている「東葛印旛大師」とすでに消滅している「葛飾大師」について、その現状と課題を整理して今後のあり方について考え方を述べてみることにした。